

## 第5章 台湾原住民の織物技術に関する 調査研究

### 5-0—[はじめに]

●台湾原住民の伝統的な服飾は織物が主な素材となっている。諸族の機織の道具は類似しており、多くは木製の経箱(経糸ビーム)及び数本の棒からなる水平式織機である。織の道具は簡単であるが、さまざまな知恵を駆使し、諸族文化において特色ある美しい織物を創り出してきた。近代の原住民は国民教育の影響を受けて、多くが腰機(Backstrap loom)、あるいは改良された簡易織機で織物を織っている。

●台湾原住民の織物は、他の民族の織物と同様に一般的に縞文様、綾文様、三角形、及び菱形文様を基本的な装飾文様としている。彼らの織物は平織と斜文織を中心となりながら、それから発展させた複合構造や特殊技法が盛装の製作に応用された。これら巧妙な製織技法は、過去の織りの断絶時期を経て、今回の調査地域においてはすでに見られなくなっていた。

●台湾原住民のカラフルな錦織のほとんどは、完全に手間を掛けた花織であり、その織りは自動化された織機の「通経」(緯糸がすべての経糸に対して通し糸となる)方式では織り出すことができない。そのため、織り出された織錦は、いずれも大変貴重なものである。本文は調査活動の中で採取した織物と刺繡品を研究題材とし、それら織物の構造、組み紐の組み方、刺繡技法をまとめる。

### 5-1—研究背景

●台湾原住民の織物の技術は、昔から直接体で覚え、口で伝えながら伝承してきたため、文字や図録などの記録資料はまったくない。1895年以降50年間の日本統治時代には機織が禁止されており、また終戦後の現代化の衝撃により、現在は手織の技術を知っている年配の人も少なくなり、伝統的な手織の技術は失われつつある。1999～2002年、台湾輔仁大学の織品服裝学科は、中華民国行政院原住民委員会の経費補助を得て、また諸教員の専門的な指導を得て、「台湾原住民伝統染織工芸師の育成」プログラムを二年間実施した。文化・デザインの授業のほか、主には織・刺繡・服装製作の実習を行った。その中で、織物の技術の面では、参加者たちが伝統的な原住民の整経・製織の技術を習得した上で、私が分析したタイヤル族の伝統織の方法に従って、伝統的な織文様を織り出し、失われた技術の再現を行なった。

●教育プログラムが終わって、私はそれらが原住民の織物のほんの一部に過ぎず、実際、諸族の貴重な織物技術にはまだまだ研究保存の必要があると感じ、輔仁大學の中華服飾文化センター及び台中縣立文化センターのコレクションを用いて継続的な分析研究を行った。十数年間、すでにタイヤル・タロコ・セディック・ブヌン・プユマ・パイワン・ルカイ・タオ・サイシャットなど、諸族の織物の図案と構造を記録した。2009年末からは日本神戸芸術工科大学の「台湾原住民文化に関する調査研究」活動に参加し、原住民集落における現地調査を通して、原住民の伝統的な生活スタイルと織物の近況を知ることができた。また、過去研究の中での一部の疑問を明らかにすることができた。

### 5-2—研究目的

●台湾原住民諸族の代表的な織物は、世界の少数民族の織物芸術の中で高い評価を受けており、コレクターたちにとっても織物工芸の珍品である。しかし、現在一部の貴重な技術の消失が進むことにより、既存の織物への分析を通して織物技術を復興・保存し、未来への展開・創造に繋げていくための参考資料とすることが期待される。そのほか、台湾原住民の織物の技術は、他の国に暮らす太平洋南島語系の原住民と関連がある可能性も否定できない。20世紀初頭、アメリカの考古学者が撮影したフィリピン北部の山間部の原住民Tinguian族が使用していた織機は、台湾原住民(タオ族)の伝統的な腰機に大変類似している。これらの地域の織物の技術や文様については、今後さらに比較研究を持続的に行う必要があると考える。

### 5-3—調査研究の地域的範囲

●台湾原住民の服飾技術は、概ね織・刺繡・珠繡(ビーズステッチ)、および貼布(パッチワーク)の四種類がある。本研究の調査においては、台東県の太麻里、高雄県茂林郷の多納、屏東県霧台のルカイ族とパイワン族が十字繡(クロスステッチ)を好んで行なっていたほか、タロコ・セディック・タイヤル・ガバラン・ブヌン・プユマ・タオ族の地域では織りが珍重されており、珠繡や貼布繡、直線平針繡などの技法は見られなかった。本文では本調査で採集したさまざまな技法について類型分析を行った。織りの構造のほかに、数少ないが刺繡と

組紐の技術についても紹介する。

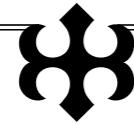
●本文は2009年12月18-25日、2010年8月11-18日、2010年12月25-30日、2011年8月5-10日、日本神戸芸術工科大学黄国賓先生に同行した現地調査活動の中で採集した服飾の資料を主な研究対象とした。その現地調査地域は以下に示したとおりである。

- ◆花蓮県秀林郷…タロコ族
- ◆花蓮県豊浜郷…ガバラン族
- ◆花蓮県吉安郷…アミ族
- ◆花蓮県萬榮郷…ブヌン族
- ◆台東県海瑞郷…ブヌン族
- ◆蘭嶼榔油村、野銀村…タオ族
- ◆台東県卑南郷…プユマ族
- ◆台東県太麻里郷…ルカイ族
- ◆屏東県來義郷、山地門郷、霧台郷…パイワン族、ルカイ族
- ◆高雄県茂林郷…ルカイ族
- ◆南投県仁愛郷…セディック族、
- ◆南投県魚池郷…サオ族
- ◆南投県信義郷…ブヌン族
- ◆苗栗県大湖郷、泰安郷…タイヤル族
- ◆台北県烏來郷…タイヤル族
- ◆桃園県復興郷…タイヤル族
- ◆宜蘭県南澳郷…タイヤル族

### 5-4—台湾原住民織物技術の特色

●台湾原住民の織機の中で、経糸の密度をコントロールするreedがなく、織幅の上で直接織幅を調整する。経糸の密度は比較的高めになっており、荒い苧麻の纖維材質を使った手紡ぎであるた

<p>め、ほとんどの織物が粗く厚いものとなっている。世界中の多くの織物と比較すると、台湾原住民の織文様の種類は限られており、主には平織(plain weave)と斜文織(twill weave)の二種類の基本組織が主流となっており、二重組織(double weave)や朱子織(satin weave)、蜂巣組織(honeycomb weave)、模紗織 (imitation Gauze)、ねじり織 (distorted thread weave)、パイル織(pile weaves)など特殊な織組織は見られない。しかし、台湾原住民は文様や色彩を豊かにするために、早くからたいへん上手に変化組織や複合組織、またはエリアごとに異なる組織を取り入れた聯合組織の織り方を生み出した。複合組織の中で最もよく見られるのが絵経(extra warp)と絵緯(extra weft)であり、これは主に装飾文様を織る技法として、重要な祭典で着る華麗な盛装に使われる。日常服の織物は、その多くが縞紋や斜紋、菱形を装飾しており、その文様や色彩が大変シンプルなものである。一方、盛装のために発達した織錦は台湾原住民の織物の高度な技術や芸術を代表する。これらの織物は、多くは裏面から織っており、工程が複雑で大変手間がかかる。このような高度な織物技術は、その多くがすでに失われており、研究のポイントとなる。</p> <p>●織り構造の良し悪しは直接その文様の効果に影響し、また織物の堅牢度を評価する重要な要素である。織物の文様が複雑で色の数が多くなると、織り構造の応用と浮糸の処理ははるかに複雑になる。原住民諸族の織物の構造からは、技術の違いが明らかにみられる。</p> <p>●原住民は、製織の際に足と腰の力を加減することで、経糸を上げるとき(経糸を緩める)と緯糸を打つとき(経糸を引っ張る)の張力を加減し、刀杼で緯糸をしっかりと打ち込む。このような方式で織った布は、一般的な織機で織った布と違った効果が見られる。後者は織る際にその経糸がずっと張力を受けていたため、簇で緯糸を打つとき経糸</p>	<p>が緊密にくつつくことができなくなる。</p> <p>●台湾原住民の織物技術は、西洋の織物の構造についての考え方と違いがあるが、その主な理由はその異なる織機の機能や制限に関係する。織機の機能が制限されたときに、人類はその制限を乗り越えるための方法を考える。たとえば、苗栗県泰安郷のタイヤル族の一部縞状の装飾文様は、経糸の色設定とわずかな綜続を用いて、数種類の花文様を作り出している。また、宜蘭県南澳郷のタイヤル族は、五本糸を一組にした双経花織技法及びパイワン族が横縞文様を織るときに用いる双面織りは、いずれも稀に見る珍しい技法である。そのほか、台湾原住民が使用する織機は、布を織る途中でも、織り文様の変化の際に必要に応じてシャフトを取替えすることができる、この点は技術の操作上大変便利である。それに対し、Dobby loomは固定的な綜続通しの規則(harness draft or drawing-in-pattern)の制限を受け、一枚の織物を織る時に、必ずあらゆる図案がその限られた綜続数の制限内で織らないといけない。この点は、現代Dobby loomを用いて原住民の複雑な錦織りを複製する際に、必ず解決しないといけない問題であり、また技術転換を必要とする最も重要なポイントである。</p>
<h3>5-5—技術報告(織りの道具)</h3> <p>A. 織りの道具</p> <p>●織りの道具においては、以下の項目で述べる。</p> <p>①—台湾原住民伝統的な織りの道具②—台湾原住民の現在の織りの道具③—タオ族の整経とzong guan bangの設置④—* * 式織機とDobby loomの技術的な論理比較。</p>	 <p>*fig.1 ↑ (上)蘭嶼榔油村のタオ族の腰機 (黃國賓撮影)</p> <p>*fig.2 ↓ フィリピンの原住民の機織。経糸の端を前方の壁に固定し、両足で一本のT字型の踏み棒を踏みつけている。</p> <p>(画像の出典:(https://dl-web.dropbox.com/get/Field%20Musuem%2C%20Tinguian%20Blankets%2C%20FCCooper%20collection/Field%20Mu.%20Cole%20photos/DSCF0237.JPG?w=d65248d3))</p> 



### 5-5A-2 現代台灣原住民の織り道具

●三回のフィールド調査の中では、蘭嶼のタオ族が伝統的な床に座って織る織り方を今に受け継いでいることを見ることができた。しかし、台湾本島に住む中年から若い原住民の学生たちのほとんどは、輸入されたドビー織機(Dobby loom)→\*fig.3や足踏織機→\*fig.4、或いは改良式織機で機織をしていた。原住民が織り方を変えた理由として以下の四点が考えられる。

①—縦と横の織物構造は、異なる織り方での複製が可能である。

②—原住民が新しい技術への受け入れた。伝統的な腰機の操作は手を動かすだけではなく、腰や足の力が必要であり、非常に大変である。

③—現代の織機ではもっと幅広い織物を織ることができる。

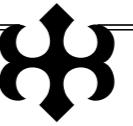
④—ドビー織機で織ると組織の変換がすばやくできる。

●ドビー織機はその便利性があるが、その綜緒の枚数に制限がある。一部原住民の複雑な錦織の場合、高機の綜緒の枚数の範囲を超えていたため、そのような状況では、手動で経糸を数えながら文様を作らないといけなくなる。また、一枚の織物に数種類の異なる文様が織り込まれている場合には、原住民の伝統的な腰機の方が有利になる。織機の設計概念が異なることにより、その技術運用の論理も異なっているのである。

●現代の原住民は、輸入簡易帶織機(Inkle loom)を用いて帯を織っている。それは切り目のない循環型の整経方式を以って、奇・偶数の糸を交互に引き上げながら織る最も単純な平織の帯である→\*fig.5。花織の場合は、地経のほかに1組の経糸(絵経extra warp)を追加し、文様に従って経糸を引き上げる(挑経)→\*fig.6。或いは、二本の基本の緯糸(地緯)の間に文様の必要に従って色糸(絵緯extra weft)を加えることもある。この二種類のいずれの方法でも、文様帯を織ることができる。



①-\*fig.3→ドビー織機 烏来 タイヤル族 彭玉鳳  
②-\*fig.4→足踏織機 烏来 タイヤル族2010/12  
③-\*fig.5→タロコ族の平織の帯  
④-\*fig.6→金属素材で作った  
Inkle Loomによる絵経(Extra warp)  
絞織り—彭玉鳳



台東県卑南郷と屏東県來義郷では、Inkle Loom帶織機を用い、数枚の四方形の四つ穴のカードを付けて、カード織(Tablet weaving)の技術を利用して菱紋の帯を織っていることを見た→\*fig.7。なお、苗栗県泰安郷では原住民がInkle Loom 様式に基づき、伝統的な腰機の操作原理を融合させた、金属パイプを以て作った改良式の織機を見た。パイプを増加することにより、平織だけではなく斜文織、菱形の文様を織ることができる(\*fig.8、\*fig.9)。なお、いくつかの部品を取ると、織機を整経台として使うことができる。これらはすべて台湾原住民が近年外来織機道具を取り入れて、新しく創り出した方式である。

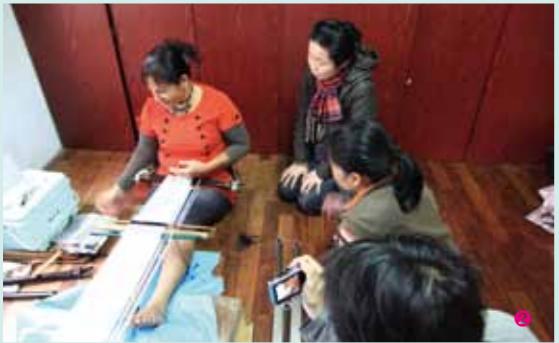
### 5-5A-3 タオ族の整経と綜緒棒の設置

●布を織る前に糸を準備するほか、最も重要なのは整経作業である。タオ族は台湾のほかの民族と同様に、長方形の平板の上にビーム(木の棒)を立てて整経道具とする。整経の際には手で経糸を引っ張りながら一定の順番にしたがってビームに糸を巻き、必要な糸の本数になるまでその動作を繰り返す。経糸の長さは、仕立てる衣服の長さによって決められる。異なる長さの整経ができるよう、タオ族の昔の木製整経台には十数個の穴が開けられ、織手は必要に応じてビームを適した穴に差し込んで、必要な長さの整経を行ってきた。われわれが蘭嶼で見た現代式の整経台は素材が金属になっており、その形も七本の棒に簡略化されていた→\*fig.10。しかし、それでもタイヤル族の伝統的な整経台よりは、ビームが2本多いことになる。手動整経は、一般的に経糸を巻く際に、同じ場所で前後の糸を交差させることで経糸の並び順番を確保し、奇数・偶数糸を区別する。

●整経は一般的に单糸整経と双糸整経の二種類に分類する。台湾原住民の整経は二杼口(平織)と三杼口(三枚斜紋)の二種類がある。二杼口的



①-\*fig.7→Inkle loom帶織機で卡片梭織技術を応用して菱形文様の帯を織る(左)台東県卑南郷、(右)屏東県來義郷  
②-\*fig.8→改良式のInkle Loom。写真は一組の糸綜緒による平織。苗栗泰安郷梅園村高月英提供  
③-\*fig.9→苗栗泰安郷改良式Inkle Loom。一組の糸綜緒を追加し、三つの杼口により斜紋や菱形紋を織る  
④-\*fig.10→タオ族の現代の整経台



整経は、開口分離具と糸綜続棒を利用して、奇数糸と偶数糸を順番に上下させることにより、平紋を織る。三杼口の整経には一組の糸綜続棒を追加し、一本の棒を上げるたびに三分の一の経糸が上げられる。このように順番に棒を上げながら、斜紋や曲折紋、菱形紋を織ることができる。

難しいテクニックが必要な織りは、紋織りの過程で二種類の異なる組織の文様を同時に織り込むものであり、前述の平織や斜文織のような基本的な装置以外に、それぞれの織紋の規則に従って経糸を引き上げて新たに分離棒または糸綜続棒を設置する→fig.11。前の文様を織り終わり次の段の織紋を織り始める際、もし前の段の織紋に設定した綜続上げを共有できない場合、必ず分離棒と綜続棒を改めて設定する。綜続棒を設置しなおすときには、他の開口を妨害しないよう必ずそれぞれの棒の位置を良く確認する必要がある→\*fig.12-1～12-3。

#### 5-5A-4 腰機 (Backstrap loom)、

##### ドビー織機、及び足踏織機の技術的論理の比較

●台湾原住民が使う腰機の綜続棒は、足踏織機の踏板と同じ機能をしている。布を織る際は、異なる綜続棒を引き上げることにより経糸の上げ糸を調整しており、それは足踏織機で踏板を踏み分けるのと同じである。原住民が文様を織る時に、綜続棒を入れ替えるのが、それは足踏織機で一つの文様を織り終わって異なる文様を織る際には、綜続と踏板のタイアップを変更させるのと同じ意味を持つ。

●足踏織機で経糸の綜続通しは、ドビー織機と同様に順番通し (straight draft)、山形通し (point draft)、セッション通し (section draft)などの方式

①→fig.11→タオ族、織る前に織文様の必要によって経糸を引き上げて綜続棒を加える

②→fig.12-1→蘭嶼の朗島集落でタオ族の女性が整経・製織する過程を見学

③④→fig.12-2,12-3,→タオ族の織機は、分離棒と綜続棒を設置する際にその前後順番をよく確認しないといけない(蘭嶼椰油村)

で行われる。緯糸を通して布を織る際には、足踏織機は一本の踏板を踏むごとに、一本から数本の綜続の経糸を同時に上げることができる。それは一枚の踏板に数本の綜続を同時に繋げができるためである。これはドビー織機が緯糸を打つ際にそれぞれの綜続を一つずつ上げる方式と異なる。原住民の伝統的な織機はドビー織機と足踏織機の織り方とだいぶ大きな違いがあるが、その織り文様の構造やタイアップの面では理論的に相通ずる。簡単に言えば、一つの織物の技術図にとって、三種類の織機はその操作を示す図は異なるものの、実はドビー織機のタイアップ図は、足踏織機の場合は踏板と綜続との結びを示す図であり、腰機の場合は綜続棒による経糸の引き上げを示す図である。(注:タイアップ図とは、機織の際にどの綜続を上げるかを示した図である)。

●たとえば:三種類の異なる織機の綜続通し図と文様意匠図が同じであるとしたら、ドビー織機の綜続を上げる順番は:(1)6, (2) 1.3.5, (3) 2.4.6, (4)3, (5)2.4, (6)1.3.5, (7) 2.4.6, (8)3, (9)6, (10)1.3.5, (11)2.4.6, (12)1.5。この12回の綜続上げをまとめると、合計5種類の上げ方がある。(タイアップ図を参照→fig.13)

●もし足踏織機で織る場合、その踏板の数は合計五本になり(タイアップ図を参照)、1本目の踏板は1と5枚目の綜続棒に、2本目の踏板は3枚目の綜続棒に、3本目の踏板は6枚目の綜続棒に、4本目の踏板は2と4と6枚目の綜続棒に、5本目の踏板は2と4枚目の綜続棒に連結される。この部分は腰機の場合に必要な綜続棒の数および経糸を上げる設定と同じであり、下記の順番とおりに踏板を踏みながら緯糸を通す。(綜続上げの順番図)(1)3枚目, (2)1と2枚目, (3)4枚目 (4) 2枚目(5) 5枚目(6) 1+2枚目 (7) 4枚目(8) 2枚目(9) 3枚目 (10) 1+2枚目(11) 4枚目(12) 1枚目。

●腰機の織り方は足踏織機と類似した理論に基づき、その文様を織るために同じく5本の棒が必要

1	2	3	4	5	6
6					○
5				○	
4			○		
3		○			
2	○				
1	○				

綜続通し

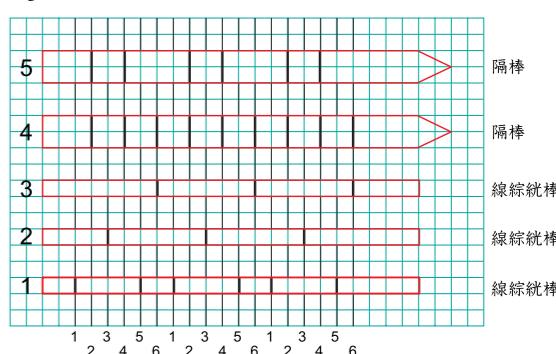
1	2	3	4	5
	X		X	X
X			X	X
		X		
			X	X

タイアップ

12	X			X
11		X	X	X
10	X	X	X	
9				X
8		X		
7	X	X	X	
6	X	X	X	
5	X	X		
4		X		
3	X	X	X	
2	X	X	X	
1				X

\*fig.13↑ 文様意匠図

綜続上げの順



\*fig.14↑

となる(タイアップ図を参照→fig.14)。しかし、棒を設定する際には必ずその順番についてよく考えてからにしないといけない。たとえば、前の1、2、3本目の3本は必ず糸綜続棒を使い、4本目の綜続棒の前に置かないといけない。それは、前の三本の経糸はすべて4本目の分離棒の下に敷かれており、それらを前面に持ってくることにより糸綜続を使って経糸を上げることができる。そうでない場合には糸が絡んでしまう。

## 5-6—技術報告(織文様の種類)

### B. 台湾原住民の織文様の種類

●台湾原住民の織文様の構造は(weave structure)、平文組織と斜文組織、およびこの二種類の基本組織から発展した変化組織、たとえばひとつの完全組織(repeat)内で、二種類の異なる織文様を交互に組み合わせた複合組織(たとえば絵緯、絵縫)、或いは一枚の布地上で、区域毎に異なる織文様を織り込んだ聯合組織がある。織物構造配列の組み合わせは非常に変化が多いため、これまでの台湾原住民の織物技術に関する紹介は、一般的に大まかな類型を記述するに留まっている。複雑な錦織の細かい構造変化について詳しい説明がなされてこなかったのは、その主な理由として原住民が織物の技術に関する資料を残してこなかったことが挙げられるが、その他に、花織の技術について正確に説明するためには、専門家がそれぞれの織物について細かい分析と試し織りを行わなければならず、これまでその面における研究資料がかなり欠如していることも重要な理由として挙げられる。本節では、過去数年間で本人が分



\*fig.15→平文織

\*fig.16→花蓮県豊浜郷芭蕉糸工坊(ガバラン族)

①-\*fig.17→桃園県復興郷 王碧珠提供/タイヤル族

②③-\*fig.18,19→細かい縞文様の平織/宜蘭県南澳郷/范美足織/タイヤル族

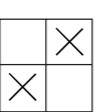
析してきた台湾原住民の伝統的な織物技術についてまとめる。一部の技術名称については、どうしても分類しきれない問題もある。たとえば、「絵緯」という複合組織は、その構造の組み合わせが多岐にわたり、また織の技術の面からも異なる特徴が見られるため、分類の際にはその主な特徴のみを考慮する場合がある。

●ここで特別に説明したいことは、台湾政府による原住民の伝統的な知的財産権に関する保護法律が制定され、台湾原住民の資料を用いた公的発表は、必ず有権者に使用許可を提出しなければならない。伝統技術に関する知的財産権の論争を避けるため、ここでは、その技術特徴と分類について述べるのみにする。

●台湾原住民の服装には、以下のような技術が用いられている。

#### ◆[1.]—平文織](plain weave)

●平文織(\*fig.15)は織構造の中でもっとも緊密な組織であり、二本の経糸と二本の緯糸からひとつの一完全組織(repeat)を構成している。経糸と緯糸の密度が同じものを「正平文」と呼び、文様が方正である。もし、経糸の密度が緯糸より遥かに大きい場合、布面上に経糸が緊密に並び、緯糸



\*fig.15(右)  
\*fig.16(左)



④-\*fig.22→苗栗県泰安郷天狗部落/高月英提供/タイヤル族

⑤-\*fig.23→宜蘭県南澳郷/彭秋玉提供/タイヤル族

⑥-\*fig.26→南投県昭和文物館提供/ブユマ族

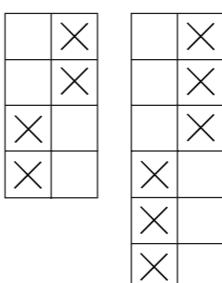
⑦⑧-\*fig.27→宜蘭県南澳郷/范美足織/タイヤル族/裏面

がほとんど経糸に隠れてしまう効果となる。このような平文を「顕経平文」という。台湾原住民の平文織は(\*fig.16 ~ 19)、一般的に経糸の密度が緯糸の密度より大きい。特に、経糸による縞文様を織り出す場合、すべて顕経平文織となっている。たとえば、経糸が黒と白が一本ずつ並ぶなら、黒と白の縞文様が現れる。

#### ◆[2.]—平文花織](plain weave with the pattern picked out on the warp)

●平文花織は平文組織を基本組織とし、二種類の異なる色の経糸が1:1の順に並び、経浮(\*fig.20,22)または緯浮(\*fig.21,23)によって文様を現わす方法である。経浮による花織は、杼口の下に沈んでいた経糸を引き上げて、経糸による浮き文様を作る方法である。通常経糸の飛び数は三本までとする。一方、緯浮による花織は、緯糸が経糸を三本以上(五本、七本)跨って、浮きあがった緯糸による装飾効果を生み出す方法である。(→\*fig.23の黒色斜文を参照)

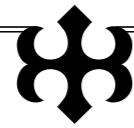
#### ◆[3.]—経畝織組織](warp rib weave)



\*fig.24(左)→経浮二本  
\*fig.25(右)→経浮三本

●変化平織の一種。杼口が開くたびに、二本以上の緯糸(経浮二本以上)を入れる(\*fig.24,25)。経糸の密度が高いと、表面からは緯糸がほとんど見えない。ブユマ族とアミ族の男性が使う橙・黄・黒灰色の縞文様の腰帯(\*fig.26)は、いずれも経畝織を地組織としながら、一部の縞に経浮(黒)と緯浮(橙)組織を利用した浮き文様を作っている。





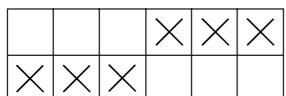
①-\*fig.29-1→輔大織博館收藏/ブン族

②-\*fig.29-2→台中県立文化中心編織工芸博物館收藏

③-\*fig.29-3→ブン族(表と裏面の写真)

●宜蘭県南澳地域のタイヤル族の多色織錦は、経畝織を基本組織とする(→\*fig.27)。大きめの文様が特徴で、地糸を浮かせて文様を表すため、手間がかかり、大変複雑に見える。南澳織錦は、経糸と同じ色の地緯を用いるのではなく、直接二、三本の色糸で織り出すため、色糸は表の文様として浮き上がるか、または平文の間に挟み込まれ、織物の背面には緯浮の糸が見られない大変丈夫な構造をしている。

#### ◆[4.]—緯畝織組織](weft rib weave)



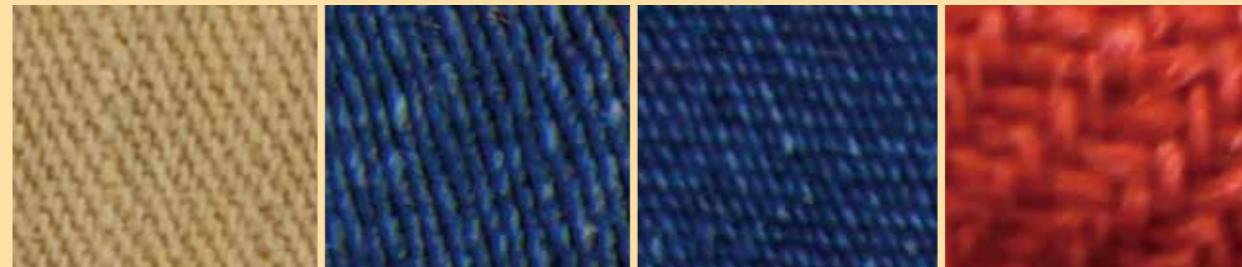
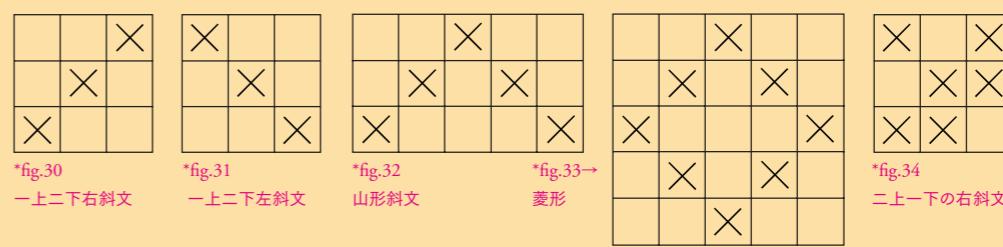
\*fig.28→緯浮三本

●これも変化平織の一種である。三本の経糸を合わせて一本化し(緯浮三本→\*fig.28)、間接的に経糸の密度を下すことにより、上下の色緯糸が緊密に並び合って、経糸をほとんど完全に覆い隠す。完全に緯糸によって文様が表現される織り方である。それぞれの色緯は、連続通經方式で織物の左右両側を往復し、異なる色の絵緯は、同

じ織り方で交互に文様として現れる。表に出ない緯糸は、浮緯として布地の裏面に沈む。文様に多くの色を使うほど、裏面の浮緯が厚くなる。このような織り方は、ブン族の女性が男性の盛装を織る際に用いる特殊な技法である(→\*fig.29-1～29-3)。

#### ◆[5.]—斜文織] (twill weave)

●最も小さな斜文の完全組織は三本の経糸と三本の緯糸から構成され、「三枚斜文(three - leaf twill)」とも呼ばれる。その特徴は、主に表面に連続的な右斜文(twill to the right→\*fig.30)、或いは左斜文(twill to the left→\*fig.31)を形成する。山の形で縦縫通しすると、左右対称の山形斜文(zigzag twill weave→\*fig.32)と菱形(diamond twill→\*fig.33)を織ることができる。台湾原住民の織物は、通常二上一下の経浮斜文(→\*fig.34)が多く、しかも経糸の密度が高くて、布面上の斜文の角度が45度以上となる(→\*fig.35～37)。

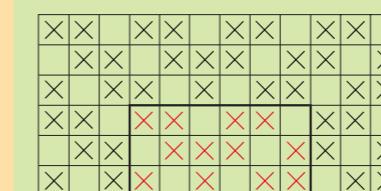


\*fig.35→45度以上の二上一下左斜文

\*fig.36-1→斜文織の表面

\*fig.36-2→裏面

\*fig.37→二上二下右斜文



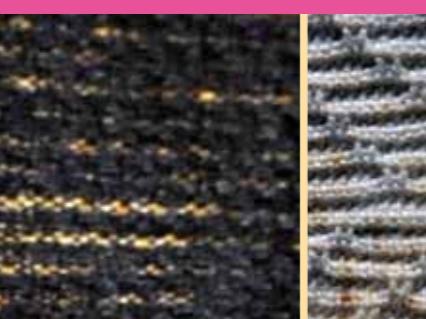
\*fig.38→文様意匠図 weave diagram



\*fig.39-1,39-2→山形斜文/南投県信義郷双小学校提供/ブン族



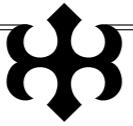
\*fig.40-1→文様意匠図 weave diagram



\*fig.40-2→裏面



\*fig.41→凹凸稜紋



#### ◆[6.]—山形斜文(zigzag twill)

●綜続通しの際、同じ方向に数回通し、再び反対方向に数回通す。緯糸を打ち込む際には、ひとつの循環単位で数回繰り返して打ち込むことにより重層的な大きな菱形文様を織り出す(→\*fig.38)。ブヌン族の織物は、大きな山形斜文織の白地が一般的である(→\*fig.39-1,39-2)。

#### ◆[7.]—変化斜文組織(fancy twills)

●タオ族の紺・白による菱形の花織は、それぞれ五本経浮の菱形斜文織と平織を組み合わせた混合組織である。経糸は白、緯糸は紺色とし、裏面を見ると緯糸の密度がかなり高いことが分かる(→\*fig.40-1,40-2)。

●また白色の横縞には立体的に文様が浮き出ている(→\*fig.41)。その文様組織は、同じ方向の二組の斜文織(二上一下の左斜文と一上二下の左斜文の組み合わせ)から構成されており、さらに菱形緯浮で菱形文様を表している。

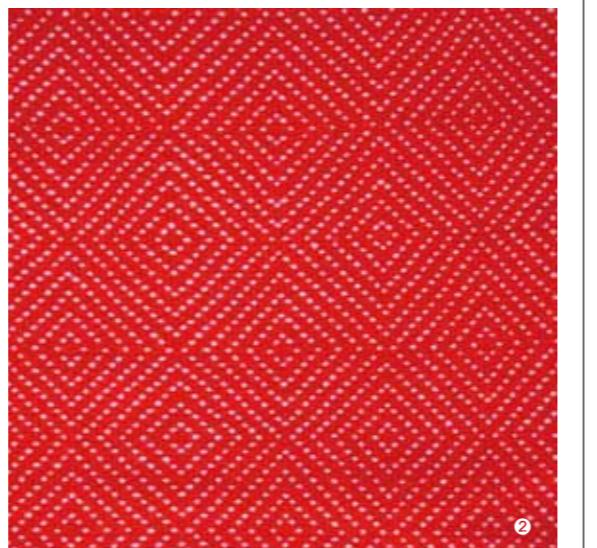
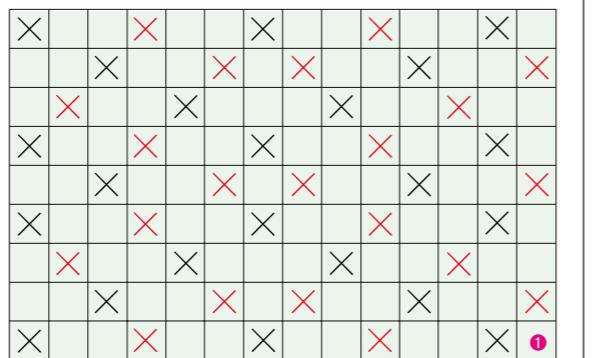
#### ◆[8.]—双経单緯の菱形組織(diamond twill)

●赤と白の二色の経糸を一本ずつ交互に並べ(1:1)、赤色の緯糸を用いると、赤地に白点の菱形文様が織り込まれる(→\*fig.42-1,42-2)。もし緯糸を白糸にしたら、白地に赤点の菱形文様となる。

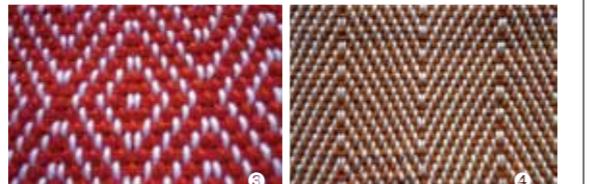
●他に、絵緯組織(extra warp)に類似した2色経糸の変化組織による菱形文様がある(→\*fig.43-1,43-2)。台湾中部泰安郷のタイヤル族の織物によく見られる縞状の装飾文様であり、異なる色の経糸を巧妙に並べた変化斜文織により、多様な小型菱形の連続文様が織り出される(→\*fig.44-1,44-2)。

#### ◆[9.]—絵緯(extra warp)

●絵緯は、基本的な一組の地経のほか、一組の色経を加えて文様を作り出す技法である。新たに追加した色経を「絵緯」と呼ぶ。台湾原住



②



③



④



⑤

①②-\*fig.42-1,42-2→宜蘭県南澳郷/范美足織/タイヤル族  
③④-\*fig.43-1,43-2→南投県仁愛郷/霧社/セディック族/張媽媽提供  
⑤⑥-\*fig.44-1,44-2→天理大学参考館収蔵/台中県泰安郷/タイヤル族

- ①-\*fig.45→台北県烏来/林美鳳提供/タイヤル族  
②-\*fig.46→天理参考館収蔵/桃園県復興郷  
③-\*fig.47-1→天理参考館収蔵/セディック族のミリ織  
④-\*fig.47-2→天理参考館収蔵/セディック族のミリ織/裏面

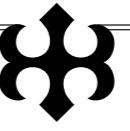
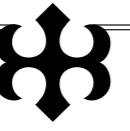


民の織物の中で、タイヤル族は最もこの技法に長けている(→\*fig.45)。絵緯は、エリア別に異なる組織や色彩を組み合わせることができ、全体的に多様な色文様を組み合わせた変化に富んだ構成を可能にする。一般的に、地経と絵緯の並びは、1:1(AB)または1:2(ABB)で規則的である。桃園県復興郷では二色経糸を一定の比例に従って並べた独自の整緯が見られる(→\*fig.46)。地経(ground warp)をA、色経をBとした場合、ABABAの順に並び、地経と色経の合計五本が一組となる。これらの多くは平織を地組織とし、経糸を浮かして文様を表現する。

●南投県仁愛郷のセディック族の「ミリ織」は、一組の黄土色を地経とし、一組の赤の浮経(warp float)を用いた平織組織である(→\*fig.47-1,47-2)。2組の経糸は1:2の比、つまり、1本の黄土色の経糸と2本の赤色の経糸が組み合わせられる。経糸の飛び数は常に3本となり、全体的に赤い経糸による菱形の文様が浮き出ている。

#### ◆[10.]—絵緯(extra weft)

●「絵緯」とは、平織或いは斜文織を地に、絵緯を加えて文様を作る技法であり、その追加した色緯糸を「絵緯糸」と呼ぶ。これは台湾原住民の伝統的な織物における装飾文様の表現に多く使われる織り方である。絵緯糸は一般的に地緯糸より太く、撚りが緩い柔らかい毛糸を用いているため、通常の密度で打ち込まれているにも関わらず、その絵緯糸により浮かび上がる文様が綴じ目をすっかり隠すことができる。製織の際に、もし綜続の設定と異なる文様を織る場合は、手動で経糸を引き上げながら文様を織り出す。これまでの多くの資料では、このような絵緯の織り方が、上下の地緯糸の間に絵緯糸を挟み込んで織ることから「挟織」と表現している。しかし、「挟織」という言葉は、その織り方の様子を形容しているのみで、専門用



①-\*fig.48→南投県信義郷/錢美芳提供/  
セデック族/平織  
②-\*fig.49→国立台湾博物館/平埔族/斜文織  
③④-\*fig.50-1,50-2→桃園県復興郷/碧緞屋/  
タイヤル族/織物の表面。織物の裏面

語ではない。

●絵緯組織を用いた花織については、(1)文様配置 (2)織り方(3)構造の組み合わせなど、大きく三つの視点から考察することができる。

#### ①—絵緯の文様配置

- [a]—局部的な横縞状の装飾は、無地の織物に局部的に絵緯糸を加え、縞状の装飾を施す。
- [b]—全面または大面積に、絵緯による連続的な大型文様を織り込む。
- [c]—点状に分散された小さなエリアに、絵緯による装飾文様を施す。



う。この種類の織物は、ほとんど四方連續文様になる。また、一色の絵緯と地緯が決まった比例で並ばれ(たとえば1:1の比、つまり1本の地緯に1本の絵緯の組み合わせ)、規則的な文様を織り出す。タイヤル族・セディック族・サイシャット族の一部のシンメトリの幾何学文様や、平埔族の赤色の単色文様は、その多くがこの技法を採用している([→fig.48 ~ 50](#))。織物の表面と裏面は、その地と図の色が相反した文様となっており、裏面の方が緯浮が比較的に少ない。

#### [b]—通経多色絵緯

●これは単色の経糸と多色の緯糸を用いた花織の技法の一つである。[\\*fig.51](#)で見られる織物は、白の地緯と赤・黒の絵緯が、それぞれ1:1:1の比で並び、赤または黒の絵緯糸は表に浮き上がっておりか裏面に沈んでいる。そのため、織物の裏面には、通経単色絵緯の技法で織られた織物に比べると、より多い緯浮糸が見られる。経糸の密度が大きくなる場合、上下の色緯が緊密に並び合って、図と地の色彩がしっかり区別される効果を生み出す([→fig.51 ~ 53](#))。

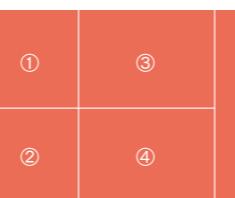
#### [c]—裏面に浮緯或いは断緯のある多色絵緯

#### ②—絵緯の織り方については、

- [a]—通経単色絵緯
- [b]—通経多色絵緯
- [c]—裏面に緯浮糸や切断された緯糸が見られる絵緯、などに分けて以下に述べる。

#### [a]—通経単色絵緯

●いわゆる「通経」とは、製織の際に緯糸がすべての経糸の杼口を通過しながら往復することをい



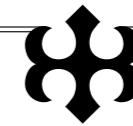
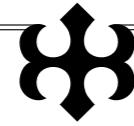
①-\*fig.51→  
台北県烏来 タイヤル族/彭玉鳳織  
②-\*fig.52→天理大学参考館収蔵  
③④-\*fig.53-1,53-2→  
国立台湾博物館収蔵/平埔族。裏面

●このような織り方は、一般的に多くの色彩を使う。それぞれの絵緯糸は織物の表面に現れるか裏面に隠れるため、裏面には多色の遊び糸が浮いている。台中県泰安郷北勢群タイヤル族の新婦の結婚衣装はこの技法で織られる([→fig.54](#))。経糸と緯糸の綴じ目が少ないので、不安定な構造となり、糸が引かれたり、捻られて変形したりしやすい。そのような場合は、丈夫な平織の生地に縫い合わせ、遊び糸を固定する方法が使われる。

●断緯とは、絵緯糸を用いて花織をする際に、経糸との綴じ目の位置から絵緯糸を直接打ち込み、その色または文様のエリアだけで絵緯糸を往復させる織り方である。なお、文様が終わるときまたは緯糸を交換するときには、絵緯と経糸が綴じる位置で緯糸を切り離して完了する。

●パイワン族の首長の花織の織物は糸の並びが緊密で、絵緯糸はほとんど織物の表面に浮き上がっており、裏面には文様と文様の間の地の部分に浮き出た色糸の遊び糸が見られない。織り手は巧妙に断緯方式を用いて、裏面の浮緯を減らし、織物の重量を軽減している。パイワン族の多色織錦は、すべて断緯方式を用いている([→fig.57](#))。





\*fig.54 ↑  
苗栗県大湖郷/簡雲生提供/タイヤル族

\*fig.55-1 ↓  
台中県立文化中心織博館/パイワン族

\*fig.55-2 ↓  
地組織は斜文織/織物の裏面  
桃園県復興郷/王碧珠提供

\*fig.56 ↓ タロコ族の織物の小紋/  
桃園県復興郷/王碧珠提供



\*fig.57-1 ↑  
南投県昭和文物館提供 アミ族。織物の裏面(経密度が高く、縞浮長は11本)織物の裏面(経密度が低く、縞糸の飛び数は七本)



\*fig.57-2 ↑



\*fig.57-3 ↑



\*fig.58-1 ↑



\*fig.58-2 ↑  
天理参考館收藏/タイヤル族



\*fig.58-3 ↑



\*fig.58-4 ↑



\*fig.59-1,59-2 ↑↑ 南投県昭和文物館提供 サイシャット族/表面と裏面  
\*fig.61-1 ↓ 天理参考館收藏/パイワン族/表面

\*fig.60-1,60-2 ↑ 天理参考館收藏/ブユマ族/織物の表面と裏面  
\*fig.61-2 ↓ 天理参考館收藏/パイワン族/裏面



\*fig.62-1,62-2 ↑ 天理参考館收藏/ブユマ族/表面と裏面



\*fig.63-1,63-2,63-3 ↑↑↑ 天理参考館收藏/ブユマ族/表面と裏面(中)



\*fig.64 ↑ 輔仁大学中華服飾文化中心收藏

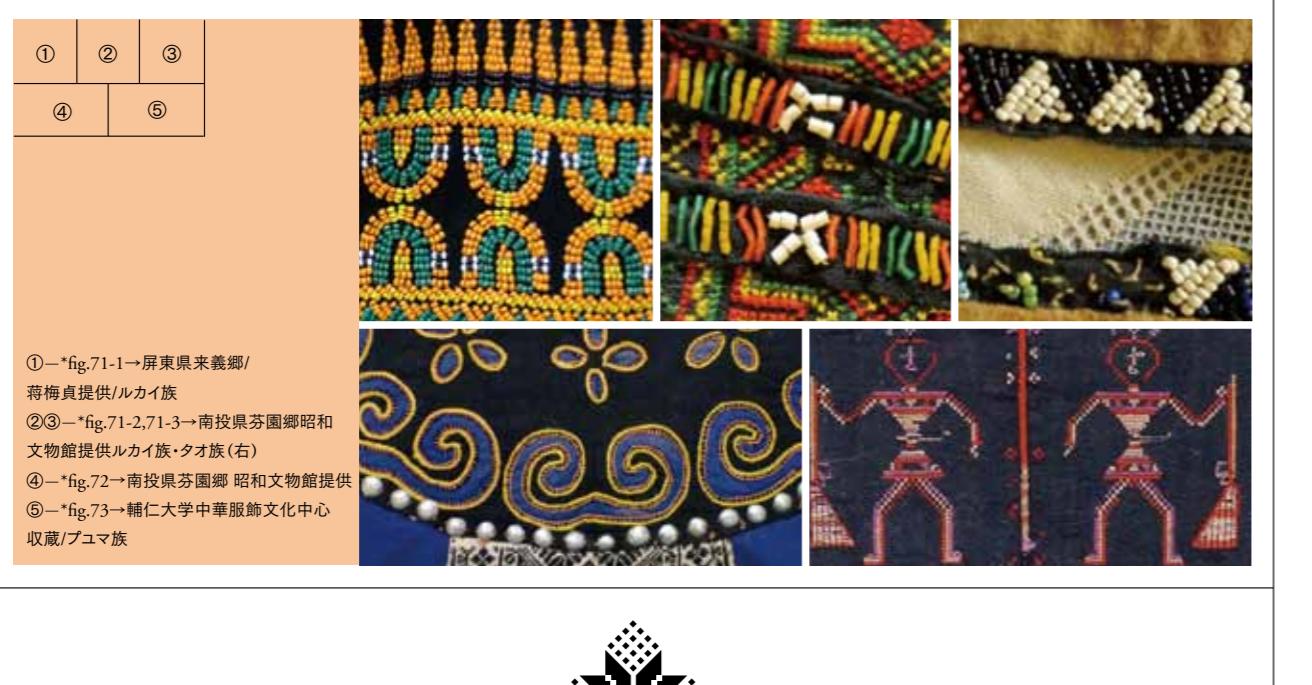


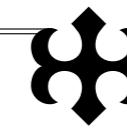
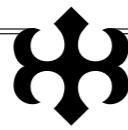
緊密な構造となっており、分析の際には大変苦労した。絵緯構造の組み合わせについては、以下の数種類にまとめる。	<p>●プユマ族の多色花織の断緯組織がその一例である(→*fig.60-1,60-2)。地は二上一下の斜文織であり、菱形文様の左右対称の斜文と異なって、その斜文は一定の方向を示す。</p> <p>[d] — 変化平織を地に、両面斜文織の組み合わせ</p> <p>●パイワン族の喪服の織物は、珍しい両面絵緯の花織である(→*fig.61-1,61-2)。絵緯は表に見られるだけではなく、裏面でも表面ほど密ではないものはっきり見られる。黒色の地緯糸は、表裏のいずれの面でもあまり目立たず、織物はかなりしっかりしている。</p> <p>[e] — 相反する二種の変化平織の組み合わせ</p> <p>●プユマ族の織物でよく見られる十字型の文様は、その地緯と絵緯が相反する二種類の変化平織(一上五下と五上一下の緯浮)を組み合わせて構成されている(→*fig.62-1,62-2)。文様はシンプルで整然としており、断緯花織により織り出されている。近代の一部の復元作品には、これらの伝統文様を、織りではなくクロスステッチの方法で表現したものがある。</p> <p>[f] — 相反する二種の斜文織の組み合わせ</p> <p>●四上一下の斜文織を地とし、緯浮斜文織(一上四下の緯浮)を組み合わせている。一定の織り方の規則にしたがい、異なる絵緯糸を用いて断緯・花織を行なう(→*fig.63-1 ~ 63-3)。</p>
[a] — 平織の地に、 変化平織の緯浮花織の組み合わせ	
●単経双緯を用い、その中の白の地緯は白経糸と交差して平織の地を構成する。赤の絵緯は7:1の比で経糸と交差しながら、浮き文様を作る。タイヤル族とサイシャット族の織物は、一般的に地緯と絵緯の比を1:2とする。白の平織の地は、表に浮かび上がった赤の浮糸に隠される。経密度が高いほど織物の裏面には縞文様が目立たなくなる。飛び数の長さは一般的に五本または七本であり、長いものは11本に達するものもある。赤緯糸の替わりに黒糸または赤と黒を同時に使う場合があり、黒と赤を交互に用いた花織では、赤と黒が交互に文様を作る(→*fig.57-1 ~ 57-3)。	
[b] — 平織の地に、緯浮花織の組み合わせ	
●タイヤル族の絵緯は一般的に平織の地に、綜続棒(または手動の経糸引き上げ棒)を用い、通経(または断緯)方式で花織を行う(→*fig.58-1 ~ 58-4)。タイヤル族の緯浮は一般的に3本を基本単位とするので、表の飛び数は三本、六本、九本などとなる。平埔族の文様はシンメトリではあるものの、緯糸の飛び数の本数が不規則である。製織の際、たとえば赤と青の二色の絵緯糸があるとしたら、地緯糸(白)と二色の絵緯糸(赤・青)の比は、一般的に1(白):1(赤):1(青)となる。	
●サイシャット族の長衣に使われる経畝織は、タイヤル族南澳群の織物と同じように見えるが、サイシャット族の織物には三本の緯糸の中に一本の白色の地緯糸が含まれており、赤と青の絵緯糸は表面に文様として浮き出たり、または遊び糸として裏面に浮き出るか、白い地に織り込まれており、織物の背面は断緯がなく、かなり堅実な構造となる(→*fig.59-1,59-2)。	
[c] — 斜文の地に、緯浮の菱形花織の組み合わせ	

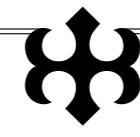
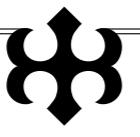
	<p>ロスステッチを多く用いる。一般的には、経緯密度が比較的低い黒色の平織の生地に、二本の経糸と二本の緯糸から構成される方形を単位とし、それぞれの方形に色糸で「×」の形に縫い付ける方式である。台湾原住民のクロスステッチ作品の中で、非常に繊細なものは1cmに十個の「×」を縫い付けている。この場合は、経緯密度の高い綿布に刺繡を施すので、かなり難度が高くなる(→*fig.65)。</p>
	<p>◆[13.] — 平行直線繡</p> <p>●平行直線繡は、同じ方向の直線に刺繡して文様を作る技法である。そのほかに、図と地の空間表現や、刺繡密度が異なるものがあるが、同じ技法を使用しているため、それらも同類に分類した。台湾原住民の中でもルカイ族が最も刺繡に長けており、その中には大変独特なものとして、多色の重層的な菱形文様の刺繡がある。同じく無地の生地(黒)に色糸による花織や刺繡を施した面構成の文様を、中国では「納錦」という。このような文様は織錦の効果がある(→*fig.66)。</p> <p>●ルカイ族には、また白色の平織の生地に、直線で黒色の文様を刺繡する技法があり、これは絵緯花織に類似する(→*fig.67)。なお、中部日月潭の辺に暮らすサオ族の服飾には、点線状に連続三角文様が刺繡されている(→*fig.68)。</p>
	<p>◆[14.] — 交差斜文繡</p> <p>●台湾原住民は、二色の交差した斜文繡を用いて、さまざまな装飾や刺繡綿布を衣服に縫いつける</p>
	<p>①—*fig.65→南投県昭和文物館提供/ルカイ族      ②—*fig.66→南投県昭和文物館提供/ルカイ族      ③—*fig.67→屏東県霧台郷/丁秋英提供/ルカイ族      ④—*fig.68→南投県日月潭/石阿松提供/サオ族      ⑤—*fig.69→南投県昭和文物館提供/ルカイ族      ⑥—*fig.70→屏東県霧台郷/ルカイ族文物館</p>



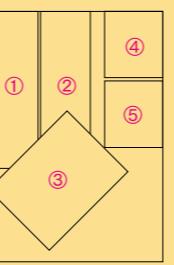
る。刺繡方法は、まず生地の縁を五本の平行斜線状に縫い、それから別の色糸で反対方向に交差して五本の斜線を刺繡する。交差していない部分が三角形を形成する(→*fig.69,70)。	◆[15.]—ビーズ刺繡 ●ルカイ族とパイワン族の貴族の豪華な盛装は、ビーズ刺繡による装飾を施す。まず、文様と色を設定してから、長針にビーズを通し、文様に従ってビーズを布上に仮留める。円形のビーズのほかにパイプ状のビーズもあり、その刺繡方法は同じである(→*fig.71-1～71-3)。
◆[16.]—貼布繡 ●貼布繡は、一枚の無地の綿布に文様の形に切り取った色布を縫いつけ、色布の輪郭線に沿って毛布の縁縫い(blanket stitche)の方式で、しっかりと生地に固定し、さらに外縁の輪郭を「逆鎖繡」して、文様を強化する。貼布繡の文様は自由に表現できるが、ほとんど伝統的な文様が用いられている(→*fig.72)。	◆[17.]—うなぎ骨繡 ●原住民の服飾の背面や肩掛けなど、二枚の布
① ② ③ ④ ⑤	    





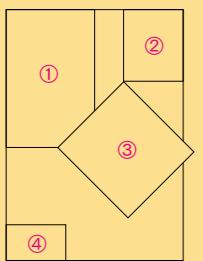
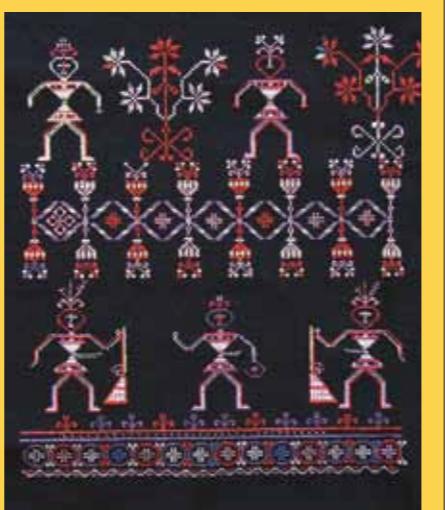
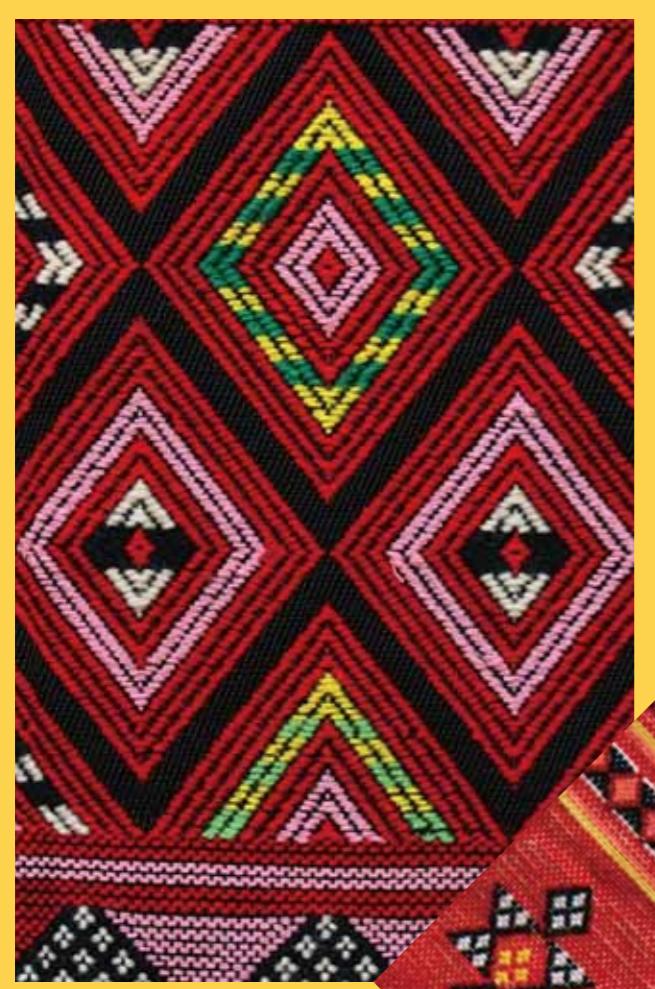
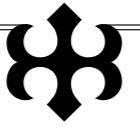


①②-\*fig.89,90→絵経/セディック族/仁愛郷(ミリ織)  
 ③-\*fig.91→蔡玉珊試作織物/セディック族  
 ④⑤-\*fig.92,93→双経单織の菱形/セディック族/仁愛郷  
 (表面と裏面)

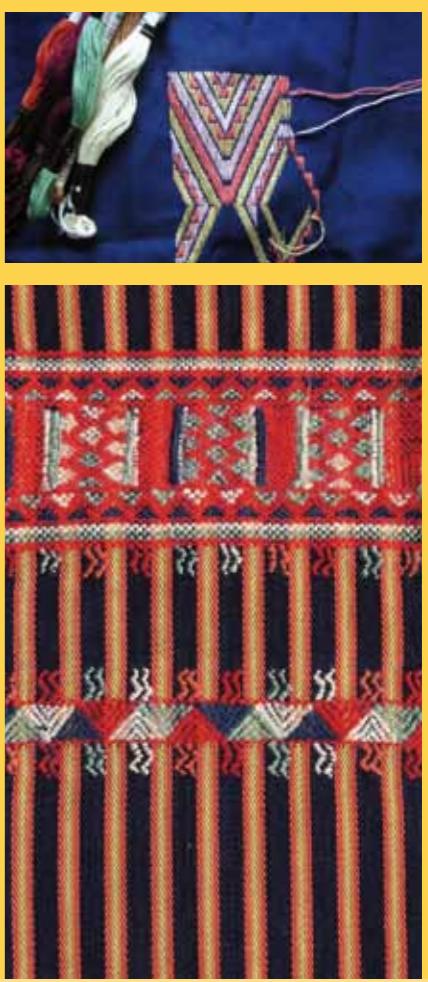
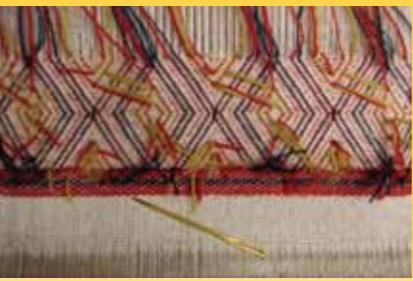
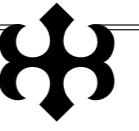


①②-\*fig.94,95→変化斜文織/タオ族  
 ③-\*fig.96→平行直線織/ブン族  
 ④-\*fig.97→縞模織、絵織/ブン族/花蓮萬榮郷  
 ⑤-\*fig.98→織+縫/ツォウ族/阿里山  
 ⑥-\*fig.99→クロスステッチ/ツォウ族

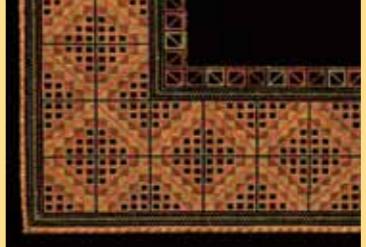
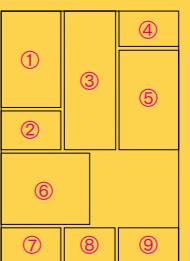


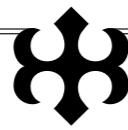


①-\*fig.100→特縞/ピュマ族  
②-\*fig.101→十字縞/ピュマ族  
③-\*fig.102→特縞/ピュマ族  
④-\*fig.103→蔡玉珊試作織物/ピュマ族



①②-\*fig.104,105→絵縞/パイワン族/裏面花織  
③-\*fig.106→特縞/パイワン族  
④-\*fig.107→蔡玉珊の平行直線縫の試作/パイワン族  
⑤-\*fig.108→特縞/パイワン族  
⑥-\*fig.109→平行直線縫/パイワン族  
⑦-\*fig.110→クロスステッチ/パイワン族  
⑧-\*fig.111→クロスステッチ/パイワン族  
⑨-\*fig.112→蔡玉珊試作織物/パイワン族

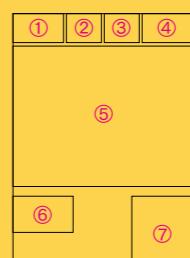


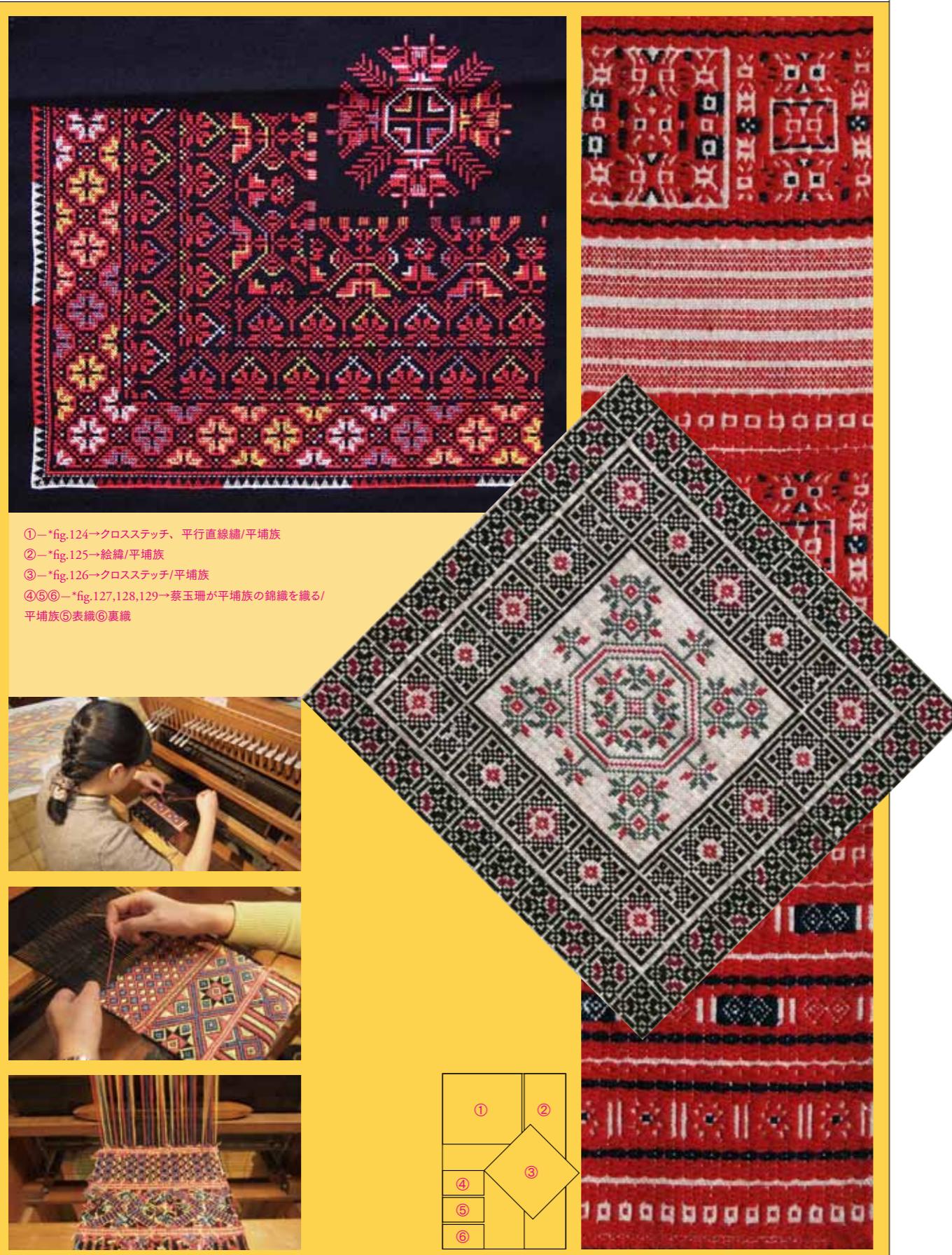
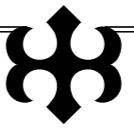


①②→fig.113,114→絵縫/サイシャット族/表面と裏面  
 ③→fig.115→特縫/サイシャット族  
 ④→fig.116→蔡玉珊試作織物/サイシャット族



①②③④→fig.117,118,119,120→平行直線縫/ルカイ族(本作品は特縫組織で縫った)  
 ⑤→fig.121→蔡玉珊が絵縫組織で平行直線縫の文様を織る/ルカイ族  
 ⑥→fig.122→クロスステッチ/ルカイ族  
 ⑦→fig.123→平行直線縫/ルカイ族





## 5-8—あとがき

- 2010年8月11-18日台湾南部を訪問したとき、山間部の険しい道路と交通の不便さは、われわれに深い印象を残した。われわれの専用車が屏東霧台郷と多納村に向かう途中、ところどころに崖崩れが残り、簡易の狭い道路や道端に散乱している石ころには随分心を冷やしたものだ。2009年夏の水災以来、山間部の道路はまだ完全に復旧されず、山間地域に居住する人々の生活やその観光産業に大きな影響を及ぼしていた。
- 織物産業の面では、原住民の民族衣装を仕立てる専門店が数件見られたが、少数の工芸家がクロスステッチやビーズ刺繡を行っているほか、一部高度な伝統織技術や刺繡工芸はすでに失われていた。元来の伝統的な花織はクロスステッチに簡略化されており、以前の難しい織り文様は簡略化されて、簡単な織り方で文様の表面的な特徴だけ真似ていた。
- 三地門郷水門村のある店舗では、海外で手作りしたり機械刺繡を行った輸入品を販売していた。そこには、台湾原住民の伝統的なテキスタイルや各種服飾素材を真似た商品が大量に並んでいた。当地の豊年祭で見た多くの若者の豪華な民族衣装は、商店で購入したものであった。これは、今や避けられない流れになっている。
- 台湾政府は、近年多くのプロジェクトを立ち上げ、原住民の各種産業の発展を支えてきた。しかし、失

われた精緻な技術を原住民の集落において新たに芽生えさせ、継続的に発展させることは大変重要な課題である。そのため各族の中に研究開発チームを組織し、民族のブランド及び販売ルートを作り、各族が自分の伝統的な織りや刺繡の優れた品質を正しく認識するようになるまでは、まだ長い期間にわたる努力が必要となるだろう。

## 5-9—致謝

●私をこの3年間にわたる研究プロジェクトに参加させていただいた黄国賓先生には大変感謝する。おかげまで、私は実際集落に直接足を運び、当地の原住民の人からたくさん教えをいただくことができた。毎回の調査において、異なる専門分野の研究者たちが互いに交流を重ねたことは、私に大きな刺激となった。また、輔仁大学織品服装学系及び台中県立文化中心には、織物の収蔵品を研究のために提供していただき大変感謝している。なお、この数年間の研究活動の中で、諸族の分析資料や写真資料の整理、一部刺繡品の復元作業に協力してくださった蔡璇珠女史にも感謝の意を示す。最後に、日本文部省の研究経費により本研究プロジェクトを円満に終了することができたことについては、本当に心より感謝を申し上げる。

執筆/輔仁大学織品服装学科 蔡玉珊